

## 奈良県

# ホウレンソウのIPM実践指標モデル

次の管理項目や管理ポイントを例にして、地域の病害虫や雑草の防除状況に応じたモデルをつくりIPMに取り組みましょう。

管理項目	管理ポイント	取り組みの ○×チェック	
		去年は？	今年は？
健全な種子の確保	立ち枯れ病予防のため、種子消毒をおこなう。		
	地域で発生しているべと病レースや萎凋病に抵抗性をもつ品種を利用する。		
ほ場の環境	ほ場への雑草種子の持込や、雑草を発生源とする害虫の飛び込みを押さえるため、あぜの雑草防除に努める。		
	病害防止のため、ほ場の排水に努め過湿に注意する。		
播種	品種に応じた適切な播種密度とする。		
耕種的防除	立ち枯れ病予防のため、発芽期から本葉4葉期までの灌水を控える。		
	有機質資材は害虫の増えにくい資材を選び、施用量を控える。		
	害虫が増えやすい資材を使わなければならない場合は、長期間の堆積処理を行う。		
	収穫後の残渣は病害虫の発生源となるため、早めに処分する。		
	太陽熱や土壌還元を利用して、土壌消毒をおこなう。		
	萎凋病予防のため、土壌pHを中性付近に保つ。		
	冬期に被覆資材を除去し降雨にさらして、コナダニ類の密度を減らす。		

管理項目	管理ポイント	取り組みの ○×チェック	
		去年は？	今年は？
物理的防除	防虫ネットなどを用いて害虫の侵入量を減らす。		
	機械や長靴等に付着した土はよく洗い落とし、他のほ場に持ち込まないようにする。		
生物農薬の利用	BT剤などの微生物農薬を利用する。		
土着天敵の保護利用	捕食性ダニ類等の天敵の生態を知り、影響の小さい農薬を選択するなど活動を保護する。		
病虫害発生予察情報の活用(基)	病虫害防除所の発表する発生予察情報を確認する。		
病虫害防除の要否の判断	フェロモントラップや誘引トラップを用いて害虫のモニタリングを行う。		
	病虫害の発生状況を観察し、防除が必要と判断された場合は確実に防除する。		
化学的防除	薬剤感受性の低下を遅延させるため、同一系統剤の連続散布を控える。		
農薬安全使用	雑草の発生状況や種類などを確認し、適切な除草剤を選ぶ。		
	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で、使用量、散布方法を決定する。		
	農薬ラベルに書かれている使用基準を守る。		
	農薬散布は、無風～微風時に飛散が少ない散布器具を使用し、他の作物などに飛散しないよう、ノズルの向きに注意する。		
	例年の病虫害・雑草の発生状況や、病虫害発生予察情報などを考慮して薬剤を選ぶ。		
作業日誌の記帳	各作業の実施日、病虫害・雑草の発生状況、使用農薬の種類、使用量等、栽培管理状況を記録する。		
	作業日誌は、おおむね3年間保管し、次作の参考にする。		
研修会への参加	県や出荷組織、研究会などが開催する研修会に参加し、情報収集に努める。		